

『新脱亜論』の示唆するもの

いつ頃からでしょうか、「モンスタ—」という形容詞を頻繁に聞くようになりました。いわくモンスタ—ペアレント、いわくモンスタ—・ペイシエント。モンスタ—上司などという、いささかこねれない文言もこのごろ耳にするようになりました。

記念写真で自分の子供を真ん中にしろとか、担任を替えろとか、あの子と同じクラスにしろなどという理不尽な要求を平気でする保護者。医師や看護師に暴力をふるったり、平然と治療費を踏み倒したり、救急車をタクシー代わりにする患者。近ごろでは、彼女に振られたといって、一〇番をしてパトカーを呼ぶといった事例までが報告されています。こうした事態を耳にするにつけ、想起するのは、梅棹忠夫氏の言葉です。十年ほど前、ある雑誌の仕事で千里の国立民族学博物館に同氏をお訪ねした時のことです。いろいろと話をしていた後、締めくくりに際して、梅棹先生は、心配に堪えないこととして、日本人が大陸人化している、中国人や韓国人に似てきているような気がする、とおっしゃ

ったのです。自らの利益よりも他者への慮りを優先し、調和を尊ぶ抑制的な資質が崩壊しているのではないかと。

こうした懸念の前提になっているのが、名著『文明の生態史観』で展

開された、日本は大陸アジアではな

く、むしろ西ヨーロッパに近いという文明観に他なりません。巨大な中央集権帝国ではなく、小規模の自治体の連合体としての封建体制を基盤に発達してきた日本とヨーロッパは、文明発達過程がきわめて似ており同質性が高いのにならして、日本と大陸アジアはまったく異質である、という提議は、大戦後の日本の国家、文化戦略を規定しました。日本の良さ、独自性は、大陸アジアと違うところにある、ゆえにアジアとの接近は日本の良さを損なう、とする指摘は、梅棹氏の外蒙古をはじめとする世界各地でのフィールドワークから獲得されたものであり、今日も、というより今日こそ耳を傾けるべきものでしょう。その梅棹氏が発した危惧が、いよいよ顕在化してきたのが、

り善がりな『コリアン・スタイル』と題したコラムのなかで、数年前、

ある空港でした体験を描いています。滑走路で離陸せずに引き返した飛行機から降ろされた楊氏ら乗客たちは、航空会社から何の説明も受けずに待合室に放置されていたということでした。

「その時、大きな声が上がったので振り返ってみると、数人の乗客が航空会社の社員らと争っていた。よく見てみると、韓国人だった。あちこちに散っていた韓国人が集まり、一人が『黙っていると損をする。騒ぐべきだ』と言った。さらに何人かが争いに加勢したことで、韓国人が集団でデモを起しているようなありさまになった。筆者も、勇気がなくてデモができなかっただけで、頭にかけていることに関しては彼らと変わらなかった。しかし周囲を見回してみると、ほかの乗客はいすに座ったりカバンを枕にして床に寝たりしたままで、この騒がしい見せ物を見守るばかりだった。そうやって待機中だった乗客が、いつの間にか半分以上に減っていたのに気付いたのは、ずっと後になってからだった。飛行機が離陸できなくなり、航空会社が乗客を呼んでホテルの宿泊券を渡していたわけだ。しばらくして見てみ

福田和也の

森英二郎

題字+絵



時評

（編集部より）

福田和也氏の本誌連載が、単行本になりました。『開う書評』（定価1365円）、森英二郎氏の似顔絵が目印です！

ると、残っている乗客の大部分は韓国人だった。航空会社が、コリアンをことごとく後回しにしたらしかった」(8/12 chosun online 朝鮮日報日本語版)

その光景を思い返しつつ、楊氏はこう述懐します。「がらんとした待合室に韓国人だけが残されていたその場面を、今でも忘れることができない。それが国際社会におけるわれわれコリアンの姿を意味している、という思いが、頭から離れない。なぜか、独島(日本名竹島)を巡る一件も狂牛病の一件も、この空港待合室の場面と重なって見える」。

楊氏は、竹島問題などについての韓国の派手なアピールが、けして国際社会の共感を得ておらず、むしろ日本の抑制的な対応が支持されていることを指摘し、その原因を、何かきっかけがあると誇大に騒ぎを起こ

す韓国国民の体質に求めています。

BSEは国際的な問題になっていますが、米国産牛肉を食べたらBSEになると国民の過半数が信じているのは世界で韓国しかない、と戒めている。「韓国が国際社会の視線を無視し、自分たちのやり方で道をふさぎ、寝そべり、デモをし、大声を上げ、物を壊し、血書を書き、剃髪(ていはつ)や火あぶりの儀式を行いながら暮らしていくならば、国際社会が独島をどのように表記しようと思わない、という覚悟も同じく持つておかなければならない。しかし、そういう人はいないだろう」。

「大陸化」する日本人

楊氏の議論は、自国の現状にたいする率直な批判とそこに籠められた憂国の情において、胸をうつものです。翻ってわが邦の現状を省みてみ

ればどうでしょう。たしかに国際社会の評価は、いまのところ高いかもしれないが、だんだんと日本人もまた、「黙っている」と損をする。騒ぐべきだ」という傾きを帯びているのではないのでしょうか。「モンスタース」の台頭は、そうした日本人の質的変化を象徴しているのではないかと、という不安を覚えさせるものです。

個々人の質的变化は、そのうち共同体を変え、会社などの組織を変え、ついには国の在り方を変えてしまうでしょう。

少し前の本ですが、その意味で渡辺利夫氏の『新脱亜論』はきわめて重要な示唆に富んでいます。同書は、福澤諭吉の『脱亜論』、マハンの影響下に『帝国国防論』を著わした海軍大学校長佐藤鉄太郎、そして梅棹氏などの議論を参照しつつ——渡辺氏は、宮沢内閣時にアジア太平洋問

題に関する総理の諮問委員会で、第一回のゲストスピーチとして招かれた梅棹氏が、いきなり「日本が大陸アジアと付き合つてろくなことはない、というのが私の今日の話の結論です」と切り出して、委員全員が呆然とした、というエピソードを紹介しています——、征韓論以来の近代日本と大陸との関係を検証していきます。

渡辺氏は、日清、日露の両戦役で日本は「旧世界」としての大陸アジアに抗する戦いに勝った、だがその後日本は大陸に深く進出したことで、本来同質であるアメリカ、イギリスと対立し自滅した、と総括します。その経験を生かし、EUのアジア版として構想されている「東アジア共同体」への参加に強い警鐘を鳴らし、アメリカとの連携がもつとも重要だと、再三、強調しています。